佳作

ありがとね、なるちゃん

埼玉県
さいたま市立上小小学校 三年
井上 大誠

ぼくには三才になったばかりの弟がいて名前は「なるみ」といいます。弟は小さくて丸くてさわるととても気持ちいいです。でもせいかくはいたずらっこであばれんぼうです。そして、おせっかいでおこりんぼです。おまけに自分で遊んだものもかたづけません。そのくせ、ぼくがかたづけをしないと弟は

「たいくん、かたづけなさい。」

と、いばって母に言いつけに行きます。

こんなにいばっているくせに、まだ時々おっぱいを飲んでいます。

こんな事をする弟ですが、やさしい所もあります。

ぼくはよく母におこられます。その時に、弟は必ずぼくの味方になってくれて、母をぶちに行きます。ぼくが悪い事をしたからおこられている時も母に向かって

「たいくんにあやまりなさい。」

と言ってくれます。ぼくは心の中で

「本当はちがうのになぁ。」

と、思いながらも

「なるちゃん助かったよ。」

と、いう気持ちになります。

それから、弟はぼくが何かしていると、

「たいくん、かっこいいね。」

とか

「たいくん、えらいね。」

といつもほめてくれます。そんな時すごくうれしいです。ただ、

「えらいね。」と弟にいわれるのは少しバカにされている気分になるけれど…。

ぼくと弟がけんかをしている時に、母が、

「なるみはたい君の弟になりたくてこの家に生まれて来たんだよ。なるみはたい君が大好きなんだよ。」

と、ぼくに言います。そう言えばよく弟は、

「たいくん大好き。」

と言ってくれます。ぼくは…あまり弟に言っていないかもしれません。

だけどぼくだって、いつもなるちゃんのことをこう思っているんだよ。

「いつもありがとね。大好きだよ、なるちゃん。これからも仲良くしようね。」